

適期収穫で良質米確保！

長岡農業普及指導センター
稲作情報 No.12

～黄化籾の割合で収穫時期を判断！～

電話 0258-38-2557

E-mail ngt111440@pref.niigata.lg.jp

8月21日発表の1か月（8/23～9/22）予報では平均気温は、高い確率 80%であることから、収穫適期が早まることが予想されます。

コシヒカリでは、高温が続いた場合、白未熟粒の発生を抑えるため、収穫適期を早める必要があります。また、台風などの影響で早めに収穫する場合があります。技術情報や出穂後積算気温表などを参考に、早めに収穫の準備を行ない適期収穫に努めましょう。

1 刈遅れによる胴割粒の発生に注意

（1）出穂期からの積算気温を参考に、早めに収穫作業の準備を

表 品種別出穂期と収穫適期の予想（8/22 現在）

品種名	出穂期(出穂期の幅)	積算気温	収穫適期のめやす
コシヒカリ	8月 1日(7/30～8/5)	950℃(※)	9月 4日(9/ 2～9)
新之助	8月10日(8/6～15)	1,000～1,050℃(※)	9月17日(9/12～22)

※収穫適期の積算気温は高温登熟年のため 50℃（2 日程度）早めている

- ・ 8月20日までの気温は本年値(長岡アメダスデータ)、8月21日からの2週間は平年値+1.1～+1.9℃、それ以降は平年値+1.9℃の予測値(気象庁「向こう2週間・1か月の予測資料」)に基づいて算出。
- ・ 積算気温表は、右記 QR コード先のホームページにて掲載しております。（普及指導センターホームページ：<https://www.pref.niigata.lg.jp/site/fukyu-top/>）



（2）収穫の判断は黄化籾の割合で確認

出穂後の積算気温が刈取適期の目安に近づいたら、ほ場全体を観察し、**黄化籾の割合が 85～90%程度になった時期に収穫**を行いましょう（図を参照）。ただし、収穫直前に高温・乾燥が続く場合は、やや早め(黄化籾率 80%)の収穫を検討しましょう。

茎葉や穂軸は緑色でも籾は成熟している場合があるため、茎葉の色だけで収穫適期を判断しないようにしましょう。

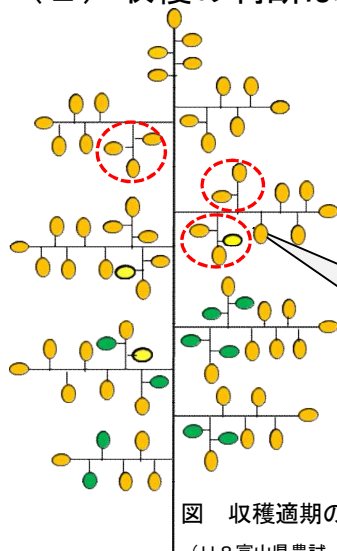


図 収穫適期の黄化籾の状況

（H8 富山県農試「籾黄化の状況と刈り取り時期」より抜粋）

点線内(上位3～4本目の1次枝梗に着生する2次枝梗籾)が黄化した時が収穫適期です。

ほ場内の平均的な穂を10穂程度調査し、8割以上の穂が図のような黄化率であれば刈取適期と判断します。

● 黄化籾 ● 黄化直後籾 ● 緑色籾

ア 出穂後の高温により胴割粒の発生が懸念されます。今後、台風によるフェーン風等の高温・乾燥に遭遇すると、さらに胴割粒が増加するため刈遅れないよう収穫作業を実施しましょう。

イ ほ場での胴割粒の発生が想定される場合は、通常より早めの収穫を検討・実施しましょう。

ウ 干ばつ被害があったほ場は、成熟期が遅くなるので、必ず籾の黄化状況を確認しましょう。また、ほ場内で生育差が大きい場合は、刈り分けを行いましょう。

2 乾燥・調製は適正に

(1) 適正な乾操作業で胴割粒の発生防止（ゆっくり乾燥）

ア 登熟初期が高温であったことから、胴割粒が通常より発生しやすいと想定されます。張り込み直後は通風乾燥とし、夜間等気温が下がってから点火するなどし、毎時乾燥速度が0.5%以下となるように加熱乾燥しましょう。

イ フェーン時など、収穫直後（乾燥機張り込み時）の籾水分が既に18%程度まで低下している場合は、水分のばらつきが大きく、乾燥により胴割粒の発生が助長される危険があるため、軽く通風循環した後、半日程度貯留して水分ムラを解消してから加熱乾燥しましょう。

(2) 1.9mm以上のふるい目や色彩選別機の活用（ていねいな選別）

未熟粒や着色粒などが多くと予想されます。整粒歩合を高めて1等級の品位に仕上げるために、調製時の流量を少なくし、1.9mm以上のふるい目や色彩選別機を積極的に活用しましょう。

(3) 乾燥後の水分変化に注意（水分のもどりを想定）

出穂の揃いが悪かった場合は、青米等の混入が多くなると想定されますので、乾燥後の水分のもどりに注しましょう。

表 乾燥後の水分変化のめやす(富山県農試)

玄米 100 粒中の青米・屑米が	11 粒以上	0.5%水分がもどる
	6～11 粒	ほとんど変わらない
	5 粒以下	0.5%乾燥が進む

3 土づくりで次年度対策の実践



(1) 稲わらの秋すき込みはできる限り早く

ア 稲わらの秋すき込みは、堆肥施用と同等の土づくり効果が期待できます。

イ 腐熟の促進を図るため収穫後できるだけ早く、遅くとも10月中旬までに完了しましょう。

ウ すき込み方法は、5～10cm程度の浅うちとしましょう。なお、浅うちは表面の稲わらが乾燥しやすいので、土壌と十分に混和しましょう。

エ ケイ酸、リン酸が不足している場合は、土壌分析・診断に基づいて土づくり資材を施用するとともに、稲わらの秋すき込みを行い、効果的・経済的な土づくりに努めましょう。

(2) 籾がら施用でケイ酸供給

ア 籾がらはケイ酸を約20%含む有用資源であり、また土壌を膨軟化する効果があります。収量540kg/10aのほ場から得られる籾がら（約130kg/10a）をすき込むと、ケイカルを約80～100kg/10a散布したのと同等の効果が期待できます。

イ 施用量は「各ほ場から得られた籾がらの量」を基本としましょう。

ウ ごま葉枯病、稲こうじ病、墨黒穂病が多発生したほ場の籾がらは伝染源となる可能性があるため施用しない。また、雑草種子が多量に混入したものも施用しないようにしましょう。

農作業中の事故、熱中症に注意しましょう！